

# 『野ざらし紀行』における風狂者の造型

米谷 巖

一

芭蕉を野ざらしの旅に招請した大垣の木因は、さらに伊勢・尾張の知友に芭蕉を紹介すべく案内する途中、伊勢の国の多度権現に参拝したが、その時のことを周知のように俳文「句商人」（『桜下文集』所収）に次のように記している。

伊勢の国多度権現のいます清き拜殿の落書、武州深川の隠泊船堂芭蕉翁、濃州大垣観水軒のあるじ谷木因、勢尾廻国の句商人、四季折々の句、召れ候へ。

伊勢人の発句すくはん落葉川 木因

右の落書をいとふのこゝろ

宮守よわが名をちらせ木葉川 桃青

大垣を立て以後の旅を、旧風になすむ伊勢・尾張の連衆に対する新風宣布のための巡業と意義づけ、「句商人」を標榜したのは、廻船問屋木因のやや勝手な思い込みの気味がなくもなかったであろう。芭蕉は、木因の軒昂たる意気込みにいささか困惑の表情を見せている。

しかし、芭蕉は木因のあまりのはしゃぎように僻易した口吻を示してはいるが、木因の慇懃に芭蕉が乗ったのも事実であろう。木因

は、やはり芭蕉を同道して桑名へ向かう道中の様子と同じ俳文で、

佗人ふたりあり。やつがれ姿にて狂句を商ふ。（中略）紙

子かいどりて、道行をうたふ。

歌物狂二人木がらし姿かな

と記しているが、その後芭蕉が名古屋の連衆に披露した挨拶句、

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉

および『冬の日』に掲げたこの句の前書「笠は長途の雨にほころび、紙衣はとまりくのあらしにもめたり。佗つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。」云々とあるのと、辞句が酷似しているのは注目される。尤も木因は、自分達を竹斎とにらみか介主徒に見立てて、「やつがれ姿」ないし「木がらし姿」と、もっぱら外見上の類似に興じているかたむきがあるのに比べて、芭蕉は「こがらしの身」と竹斎との境涯の相似を言って、内面的な捉え方をしている点の違いはあるが、風狂的心情の横溢している事では、両者多分に共通するところがある。

二

木因の「歌物狂」の句は、芭蕉の「狂句こがらしの身は」の句に旅程上わずかに先んじてはいるが、そうした木因の風狂心に火をつ

けたのも、実は芭蕉に違いない。

其角の「枯尾花」(元禄七年刊)に「貞享初めのとしの秋(中略)、いかめしき音やあられ」と風狂して」として挙げている、いかめしき音や霰の松木笠

(貞享四年「孤松」)という芭蕉の発句は、野ざらしの旅中大垣での句に「琵琶行の夜や三味線の音霰」「後の旅」という「霰」の句があることなどから推して、おそらく同じく大垣で詠まれたものであろう。この句は、『蕉翁句集』によれば「自画像賛」とある。かましい音を立てて松笠にたばしる霰を、自分ように佗びた旅姿にはいかにも晴れがましい興趣を添えるものよ、と悦び興じたもので、すでに漂泊の風狂者としてのゆるぎない自覚と自己顕示が認められよう。ちなみに「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」の句にしても、「佗つくしたるわび人、我さへあはれにおほえける」と、寒風の中を流浪する破れ紙子の佗び姿を殊更自嘲して見せてはいるが、同時にそれも「狂句」に憑かれたがゆえの乞食行脚であることを強調していることも見逃せない。風雅に狂ずるあまりの貧寒漂泊の境涯にはかならないとの自負がうかがえる。

また眼前の情景や現実を和漢の古典の類似した場面や故事に譬えて詩化をはかることは他にもしばしば見られるところであるが、先行の作中人物ないし作者に自分を擬してふるまう性癖は、芭蕉に極めて顕著に見られるところである。例えば紀行(以下真蹟画卷本による)の小夜の中山の条は、

廿日余の月、かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬の、  
上に鞭をたれて、数里いまだ鶏鳴らず、杜牧が「早行」の

残夢、小夜の中山に至りて忽驚く。

馬に寐て残夢月遠し茶のけぶり

とあるように、杜牧の「早行」の詩句をほとんどそのままなぞる形で描いている。その名のように夜更けに越える山として和歌に詠まれることの多い、小夜の中山「越えのイメージを、恰好の漢詩の辞句でもどいてみせた諧謔であると同時に、みずから作中の杜牧を気取り、漢詩人のパロディーを演じた俳諧である。

伊勢の西行谷を訪ねる途中、里の女が川で芋を洗う姿を見かけて詠んだ句、

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

は、この地にゆかりの西行がもしこの光景を自撃したら、きつと女に向かつて和歌を詠みかけることであろう、と西行追慕の心情から想像した即興句であるが、同時に芭蕉自身も「撰集抄」その他に著聞する、江口の遊女「に眼前の「芋洗ふ女」を見立て、西行に倣って発句を詠みかけたわけで、詠句の行為自体西行のパロディーを演じたことなるう。また吉野の「ある坊に一夜をかりて」詠んだという句、

碓打て我にきかせよや坊が妻

は、西行の「独聞搦衣/独り寝の夜寒になるに重ねばや誰がために搦つ衣なるらん」(「山家集」)や、雅經の「み吉野の山の秋風さ夜ふけて古里寒く衣打つなり」(「新古今集」)など、所柄、碓の古歌に懐旧の思いを寄せることで、歌枕吉野の旅情に浸ろうとした句である。尤も本紀行の跋には「翁の心、きぬたにあれば、うたぬ碓のひびきを伝ふ。昔、白氏をなかせしは茶売が妻のしらべならむや。坊が妻の碓は、いかに打てなくさめしぞや。それは江のほとり、これはふもとの坊、地をかゆともまたしからん」と、白楽天の「琵琶行」の

詩のパロディーであるとしている。たしかに、泊船本以降の紀行の前文の末に芭蕉自身が「いでや唐土の廬山といはむもまたむべならむや」と書き加えて、昔から多くの歌人がこの山に隠れて詩歌に世俗を忘れようとしたとして、吉野を中国の廬山に擬していることからもうなずけるところである。いずれにせよ、それらの詩人ないし歌人に自分を擬して、古人の詩心にあやかろうとしていることは明らかである。同じく吉野の苔清水を訪ねて詠んだ句、

露とくく心みに浮世すゝがばや

でも、伝西行の歌「とくとくと落つる岩間の苔清水汲み干すほどのなき住居かな」（『吉野山独案内』他）を踏まえて、西行が幽居して朝夕汲んだという清水のしたたりで、なるうことならこの身にしみついた浮世の塵をすぎたいと、西行が求め実行した世外の境涯に対する熱烈な憧憬を表白している。歌枕の随所で、古歌を偲んで古人に対して挨拶句を呈するばかりでなく、しばしばみずからその擬態を演じて、いわば、同一化現象を見せるのも、行為を通して「風雅に古人の心を探り」（『赤さし』）文字通り古人の詩魂に肉迫しようとする強い希求によるものであることがわかる。

紀行にはなく、また歌枕でもないが、大垣で如行亭に泊まった夜あるじが「霜寒き旅寝に蚊屋をさせ申シ」と挨拶したので対して、芭蕉は蚊屋の縁からおそらく宗祇などを連想したのであろう、

古人かやうのよるの木がらし

と応じたこと、またその夜、座頭の三味線の演奏を聴いて、琵琶行の夜や三味線の音散

と興じたことが伝えられる（後の旅）。

又この年の暮れには、いつになく長途の旅寝を重ねるうちに、つ

いに旅装のまままで年の暮れを迎えてしまった感慨を、

年暮ぬ笠きて草鞋はきながら

と詠んでいる。一句は、西行の「常よりも心細くぞ思ほゆる旅の空にて年の暮れける」（『山家集』）の歌の発想をふまえると共に、定家の作と伝える「旅人の笠着て馬に乗りながら口を曳かれて西へこそ行け」（『鞍笥物語』）の措辞を借りてパロディー化したものであるが、旅中歳暮のやるせなさをほやいているかのようであり、実は欣然として、旅人“の境涯に身を投じ、風狂に耽ける充足感がその表情にうかがえよう。

### 三

名古屋の抱月亭に招かれた時に卷いた三つ物（『笈日記』）

市人にいではうらん笠の雪

酒の戸たたく鞭の枯うめ

朝がほに先だつ母衣を引づりて

抱月

芭蕉

について、『三冊子』には「師のいはく、『此第三の附方あまた有べからず。』鞭にて酒屋をたたく」といふ事は、風狂の詩人ならずば、さも有まじ。」「枯梅“の風流に思ひ入ては、武者の外に此第三有べからず」と也」とある。第三の付け方に関連して脇の人物を、風狂の詩人」と芭蕉が語ったと伝えるが、支考の『笈日記』には、ほぼ同趣旨のことが支考の感想として記されており、果して芭蕉の言葉であったかどうかは定かでない。然し蕉門の連衆に抱月の脇句「酒の戸たたく鞭の枯うめ」が、「風狂の詩人」のイメージを詠んだ句として認められていたことは明らかである。しかも早朝馬で乗りつけて、鞭代りの梅の枯枝で酒屋の戸を叩く人物が、発句にある「笠の雪」

を酒代としてさし出すというのであるから、発句の主人公すなわち芭蕉その人を「風狂の詩人」と見立てて、挨拶したものには外ならない。また芭蕉も、「笠の雪」を売ろうという座興にからめて、貧中風雅の士の狂態のイメージを表現して見せたに等しいと言えよう。ちなみに右の三つ物と前後して、同じ名古屋の地で巻かれた「炭売

の」歌仙（「冬の日」所収）にも、

かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日

荻織るかさ市に振する

芭蕉  
羽笠

という同趣の付合が見える。

伊勢山田でも、「芋洗ふ女西行ならば歌よまむ」の句に酬和して、地元の雷枝が「宿まいらせむさいぎやうならバ秋暮」（真蹟『野ざらし紀行』）と挨拶しているように、芭蕉を迎えた各地の連衆が、芭蕉を「古人」の再来として遇し、うつし身の「風狂の詩人」に見立てて興じあつたことがうかがえる。

芭蕉も、紀行に

閑人の茅舎をとひて、

蔦植て竹四五本のあらし哉

とある伊勢山田の鷹牧や、

綿弓や琵琶に慰む竹のおく

の句文を贈った大和竹の内の里長油屋喜右衛門、

梅白し昨日や鶴を盗れし

檜の木の花にかまはぬ姿かな

と挨拶した京鳴滝の三井秋風など、各地の雅友を訪ねては、その清閑な栖居を隠士・高士の別乾坤になぞらえ、あるじの風懐の高逸、人品の涼しさを称賛推賞してやまなかった。

そうした嗜好は、奥吉野の西行遺蹟を訪ね、朝夕西行が汲んだという苔清水を見て、

露とくく心みに浮世すゝがばや

と強い調子で憧憬をうたった風狂者的姿勢とも共通する。紀行には、「西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町計わけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかに有て、さかしき谷をへだてたる、いとたふとし。彼とくく清水は、昔にかはらずと見えて、今もとくくと零落ける」と前書し、さらに「若これ扶桑に伯夷あらば必口をすゝがん、もし是杵由に告げ耳をあらはむ」と付記しているように、一句は、いかにも人界を隔てた幽邃な谷あいの質素な隠栖跡のたたずまいに、「とくくとと落つる岩間の苔清水汲み千すほどもなき住居かな」（『吉野山独案内』他）と詠んだと伝える西行の俗塵を超越した心境を見てとり、自分もその境涯にあやかりたいというもので、敬慕する西行への挨拶でもある。

そのほか旅中の連句にも、『冬の日』の五歌仙を初めとして、隠者・高士の俳や風狂の詩人のイメージを、さまざまに思い描いた付合が目立つ。

しばし宗祇の名を付し水

笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨

（冬の日、「木枯の」歌仙）

日東の李白が坊に月を見て

巾に木槿をはさむ琵琶打

（同 右）

こがれ飛たましひ花のかけに入

その望の日を我もおなじく

はせを

(同、「月とり落す」歌仙)

麻(刈)かりといふ歌の集あむ

江を近く独楽菴(一)と世を捨て

(同、「一霜月や」歌仙)

佗おもしろくとちのかゆ煮る

さらしなりの里の礎(礎)をうちゆき

(真蹟野ざらし紀行)

薄(上)をきりて逢(上)にふまけり

琵琶(上)負て鹿間(上)に入篠(上)のくま

(同 右)

宮守が油さげつも花の奥

つゝじのふすま着たる西行

芭蕉

(熱田三歌仙、「榎の花」歌仙)

朝月涼し露の玉ほこ

歌袋(袋)望(望)なき身に打(打)かけて

桐葉

(夢の跡、「牡丹薬」歌仙)

なお「冬の日」五歌仙の末尾は、次の挙句で結ばれている。

水干(干)の秀句の聖わかやかに

山茶花(花)匂(匂)ふ笠(笠)のこがらし

野水

付合は、言うまでもなく五歌仙冒頭の発句と脇、

狂句(狂)こがらしの身は竹斎(斎)に似たる哉

たそやとバ(バ)しるかさの山茶花

芭蕉

の挨拶をふまえて首尾照応させたもので、遙々木枯の中を来遊した

風狂者の旅笠に山茶花が美しく映えるよと、頼もしくも颯爽たる秀

句の聖として芭蕉を礼賛すると共に、その指導のもとにめでたく連

句を満尾しおえたことを祝したものである。初め「狂物語」という

タイトルがつけられていたと伝えられる(麦水、貞享正風句解伝書)

「冬の日」の若やかな浪漫的詩風は、芭蕉が実践してみせた風狂の

詩人ぶりに魅せられ、熱い脱俗高踏の詩精神に煽られた名古屋の連

衆との昂揚した詩的交響の所産にほかならない。

#### 四

江戸を立つ日、門人李下から「はせを野分其句に草鞋かへよかし」という錢別句を贈られて、芭蕉は、

月ともみぢを酒の乞食

(其蹟「野ざらし紀行」)

と応えているが、紀行文においては、自分をそうした風雅の乞食行脚の単なる報告者としての役割にとどめず、いわば作中人物として扱い、風狂の漂白者としての言動をより強調することに意を用いている。

例えば、紀行の中で「常に莫逆の交ふかく、朋友信有哉、此人」と推称している千里の郷里竹の内村で詠んだ句、

綿弓や琵琶に慰む竹のおく

は、前文に「大和の国竹内と云処に日比とゞまり侍るに、其里の長也ける人、朝夕問来て旅の愁を慰けらし。誠その人ハ、尋常にあらず。心は高きに遊んで、身ハ蕪蕪雉兎の交をなし、自劬を荷て淵明が園に分入、牛を引てハ箕山の隠士を伴ふ。且、其職を勤て職に倦ず。家は貧しきを悦でまどしきに似たり。唯是、市中に閑を偷て閑を得たらん人は、此長ならん。」とある真蹟懐紙によれば、もと同地の里長(油屋喜右門)に贈った挨拶吟であった。ところが紀行の定

稿本では、句形は同じであるが、前文を「大和の国に行脚して、葛下の郡竹の内と云処は彼ちりが旧里なれば、日ごろとまりて足を休む」と改めている。すなわち当初は、竹藪に囲まれた質素な住居で家業に精励しながらも、清閑にして高雅な心懐を保持する村長を竹林で弹琴する隠士になぞらえて讃えた挨拶であった。しかし紀行では、場所を千里の家のこととし、生業である綿弓を打つ音を琵琶の音に聞きなして興じ、旅情を慰める主体を芭蕉自身というより旅の風狂者に転化したのである。ちなみに、紀行の初・再・三稿までの諸本（天理本・泊船本・孤屋本）では、前文の末尾に「藪より奥に家有」という一文が付記されている。これを里長の家の位置を示そうとしたものとする見解もあるが、これだけの説明で里長を指すものとは到底読めまい。句に言う「竹のおく」に、隠士の閑居に擬した千里の家があることを説明したのであろう。画卷本では、竹やぶに囲まれた一軒家が挿絵として描かれていて、もはやそうした説明は不要であること、また「藪より奥に家有」という補注的一文がこの条の句文のトーンをそこねかねないことを考慮して削除したのであろう。

尾張の「抱月亭」（笈日記）で催された三つ物の発句、

市人いいで是うらん笠の雪  
（『笈日記』）

は、紀行では、

雪見にありきて

市人よ此笠うらふ雪の傘

と改めている。まず初句が初めは「市人」と説明的であったのを、「市人よ」と直接呼びかけるスタイルに変え、さらに「いで、是うらん」と文語体であったのを「此笠うらふ」と口語体に直すことによ

って、一句全体をはずんだ呼び売りの口調に擬した。下五も初めは「笠の雪」として雪に重点を置いていたが、紀行では「雪の傘」と改め、雪の降り積もった笠ないし傘に焦点を移している。当座は、市人に向かって「笠の雪」を売る、という奇抜な思いつきに座席の中心があったとみられるが、改案では雪見に歩いたこの笠こそ風流のシンボルにはかならないとする思いを強く訴えようとしたものとみられる。初案では商人と思われる抱月を風流を解する人物として遇した諧謔的挨拶句であったが、紀行では抱月の名を伏せて一般化し、代りに「雪見にありきて」という前文を置いて、わざわざ雪の中を徘徊した笠であることを強調した。ちなみに直接自画像を描いた句ではないが、伊勢山田の「廬牧亭」（笈日記）での挨拶吟「葛植て竹四五本のあらし哉」を、紀行では廬牧の名を伏せ、「閑人の茅舎をとひて」として掲出しているのも、句の趣意を強調する同様の配慮に出た前文とみられる。また俳文「笠の記」に「坡翁雪天の笠」として関心を寄せている蘇東坡の雪見笠や、「笠ハ重シ異天ノ雪」（『詩人玉屑』）などの詩句に見える詩人のイメージをも換起すべく、雪の笠としたものであろう。しかもその笠を、世俗の営みに媚集する人々に向かって呼び売りをする売り声に一句を仕立てて、一般の「市人」の眼には狂人としか映らないにちがいない風狂者の形象化をはかったものと考えられる。

## 五

「野ざらし紀行」は、全篇にわたって四度ないし五度の推敲を経たとされるが、その間に叙上のような風狂者像の造型という観点からの工夫の跡が認められる。

例えば伊勢山田の条の外宮参拝のくだりは、紀行の初稿本といわれる真蹟卷子本、および再稿本とされる泊船本においては、発句の後に補注的に置かれていた、「腰間に寸鉄を不帯、襟に一囊をかけて、手に十八のたまを携ふ。僧に<sup>(似)</sup>てちり有、<sup>(俗)</sup>ぞくに<sup>(浮城)</sup>て髪なし。我僧に入らずといへ共、もとどりのなきものはふとのぞくに<sup>(俗)</sup>たぐへて神前に入事をゆるさず」(真蹟卷子本)の文章を、三稿本とされる狐屋本以降は、ほとんど同文のまま前文に移している点が注目される。出家が神前に近づくことを禁ずることは、「外には沙門の形を忌み、内には仏法を守護し給」う太神宮の神慮によるとする由来が『西行物語』に詳しく説かれていることから、芭蕉は先刻承知であり、不当なしきたりとは思っていないから、芭蕉は先刻承知であり、不当にもあらず俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶり」と自嘲めかして自己紹介をしているように、外見ばかりで一向に内面が伴わず、俗塵を拭いきれぬ自分のような中途半端な者までも僧侶の扱いを受けたことを、やはり自嘲まじりにむしろ謙退の気持ちをかめてことわった一文と考えられる。

実際には三の鳥居の手前付近に特設されていたとみられる僧尼の拜所まで進んで、そこから礼拝したものと思われるが、そのことには言及せず、前文に「暮て外宮に詣侍りけるに、一ノ華表の陰ほのぐらく、御燈燈々に見えて、また上もなき峯の松風身にしむむふかき心を起して」として、一の鳥居から遙拝したかのように描いているのは、『西行物語』を下敷にしたために外ならない。またことさら夜になって参拝しているのも、やはり『西行物語』の記述に合わせたものであり、その時の発句、

みそか月なし千とせの杉を抱あらし

は他に所見が全くなく、あるいは紀行の文脈に即して後日創作して挿入した可能性が考えられなくもない(ちなみに、紀行中の千里の発句についても、同様のことが推測される)。一句は、『西行物語』にも挙げる「神路山月さやかなる誓ひありて天が下をば照らすなりけり」(『新古今集』・『御裳濯歌合])、および素堂も本紀行の序文に引く「よろづ代を山田の原のあや杉に風しき立てて声呼ばふなり」(『宮河歌合』)の西行歌の、本地垂迹思想に基づく神宮讃歌に対して、共感を表わしたものである。衆生済度の心願を以て照らすという月こそ見えないものの、千歳の神杉を鳴らす風の声に仏徳の示現を見、森厳な神威を聞きとったことを歌ったのである。すなわち芭蕉は、終始西行にあやかって皇太神の神慮に浴しえたことを言おうとしているわけで、『西行物語』には「扱も太神宮にまうで侍りぬ。みもすそ川のほとり、松のむらだちのなかにわけ入、一の鳥居の御まへにさぶらひて、はるかに御殿を拜したてまつりき。そもく当社、三宝の御名をいみ、法師の御殿近く参らぬ事は、むかし此困いまだなかりける時」云々と、西行参拝のことに続けて、法師の参入を忌避する理由が説かれた上、「深く入りて神路の奥をたづねれば又上もなき峯の松風」外一首の歌が挙げられている。したがって『西行物語』の叙述の仕方に対応させて、「腰間に寸鉄を不帯、……：神前に入事をゆるさず」の一文を前置させることがより妥当と考えたのであろう。つまり、西行の感動に迫り、その詩心を追体験しようとする人物のために、『西行物語』にのっとって、西行の伊勢参拝にできるだけ似せた状況を描出しようとしたものと思われる。

大井川の条に掲出する発句、

馬上吟

道のべの木樞は馬にくはれけり

は、素堂も序に「山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ、此吟行の秀逸なるべけれ」と、「山路来て何やらゆかし童草」の句と共に推賞している佳句であるが、実際にどこで詠まれた句であるかは判然としない。紀行でも、真蹟卷子本・泊船本・孤屋本の諸本では、大井川で川留めにあったことを詠んだ千里の「秋の日の雨江戸に指おらん大井川」の句に併記し、前書を「眼前」とするのみである。

「眼前」は、同じ旅中、大津での「辛崎の松は花より臈にて」の句について、芭蕉が「予が方寸の上に分別なし。(中略)只眼前なるは」(『雑談集』)と語ったという例と同様ここでも、まああたりに目撃したことそのまま、の意とみられる。木樞の花は「樞花一日の栄」(謡曲「敦盛」他)などと、『和漢朗詠集』以来栄華のはかないことの譬えに言われるなどのことから、もっぱら寓意的な観相の句と見られかねないことをおもんばかりで、そうではなく実景そのままの矚目吟にすぎないことをことわり、いわば「予が方寸の上に分別なき」即興偶感の句であることを強調したものであろう。

しかし、「眼前」だけでは、一句としての鑑賞には資するものの、紀行中の句としては、地理上の場所や前後の状況、句主の位置など曖昧さを免れない。その点、画巻本の前書「馬上吟」は、大河をはさんで兩岸の風景を描いた挿絵とあいまって、待望の川留めが解けて早朝宿を立ち、勇躍大井川を渡って佐夜の中山へと馬で向かうさしの途中吟であることを示唆すると同時に、次条の「馬に寐て」の句文へのスムーズな脈絡をはかったものとみられる。しかも木樞は木樞垣など庶民的な花である反面、「日東の李白が坊に月を見て 重五・巾に木樞をはさむ琵琶打 荷兮」(『冬の日』)の付合にも見られるよ

うに元来中国的季節題であり、「馬上吟」という詩題ふうの前書を配することによって、杜牧の「早行」の詩の翻案によって構成した次条「小夜の中山」の前奏としての役割をも持たせたものである。木樞の花が不意に馬に食われたことに一瞬禪的悟得にも似た感興をおぼえながら旅する風狂の詩人をみずからイメージしたものとみられる。

## 六

芭蕉の紀行作品はすべて、筆者が単なる旅の事実の報告者、語り手としての地位にとどまらず、作中の主人公としてふるまい、抒情するところに大きな特色と魅力がある<sup>③</sup>。

芭蕉は後年、許六に贈った文章の中で、「古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ草鞋に足をいたため、破笠に霜露をいとふて、<sup>(お)</sup>をのれが心をせめて、物の実をしる事をよろこべり」(元禄六年「許六を送る詞」)と述べて、「物の実をしる」ために乞食行脚が必要であることを説いている。また「古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよ、と南山大師の筆の道(に)も見えたり。風雅も又これに同じ」(同年「許六離別詞」)とも説いているが、『野ざらし紀行』の主人公は、やや「古人の跡をもとめ」るかのふるまいが目立つとも評されよう。然しそれもあくまで「古人の求めたる所をもとめ」る熾烈な願いの表れであると言うべきであろう。

芭蕉の他の紀行作品は、「この秋、鹿島の山の月見んと思ひ立つことあり」(『鹿島詣』)、「更科の里、姨捨山の月見んこと、しきりにすむる秋風の心に吹きさわぎて」(『更科紀行』)、「春立てる霞の空に白河の関越えんと、……松島の月まつ心にかかりて」(『おくのほそ道』)など、冒頭に動機ないし目的地を明示しているばあい



ほとんどであるのに対して、本紀行は「千里に旅立て路糧をつま  
ず、三更月下無何に入と云けむわしの人の杖にすがりて」云々と  
あって、具体的な目的地を示していない。この紀行が、自分を作中  
人物に仕立てて、いわは「昔の人」のめざした「無何有の郷」にも比  
すべき、「風狂の世界」の旅の物語を描こうとしたものであること  
を示唆しよう。

注

- ① 尾形尙「野ざらし紀行評釈」(「俳句」昭和44年6月号)
- ② 広田二郎『芭蕉——その詩における伝統と創造』220～221頁
- ③ 右同、351～354頁

— 広島大学文学部助教授 —